
母と娘の異世界日記

神之宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

母と娘の異世界日記

【Nコード】

N4897V

【作者名】

神之宮

【あらすじ】

母と娘は久々の親子水入らずでの休日の家でのんびりと楽しんでいたのだが、その日の深夜、父や弟が居ない家で二人眠りについてしまった。しかし巷で話題の無差別放火魔により家を焼かれ、それに気付いた時には逃げ道はなく、やがて煙に巻かれながら、私たちは永遠の眠りに着いた……。はずだった（ω、；）あれ？なんで、生きてるの？ここどこ……。ってか、お母さん若返ってませんかっ！？えっ？手紙？誰から……。は？神さま？……。（手紙読み中）……。ふふふ（#ノ、）……。今度会ったら楽しみ

ですね☆グッシャ・・・ふふ。
プルプル（（（（（（
プルプル↑神

prologue (前書き)

初投稿です。暖かく見守ってください（＾▽＾）！

prologue

今日は私、水無月葵^{みなづきあおい}は久々の里帰りでございます！！いや、実家はやっぱり落ち着くわw今は大学が夏休み真っ盛りなので、現在お母様の手料理に下鼓をうちつつ、のんびりお母様と今後の予定を決めているところです。

「お母さん明日仕事ないから、買い物行く？」

「行く！勿論行きます！」

「じゃあ、明日は早く起きなさいね。あんた待ってたら日が暮れるから」

「あははは（ノ、＼、；）・・・努力しまゝす」

まあ、こんな会話をしながら、なにかと私たち親子は仲がイイ。近所や友達果てには学校の先生や母の会社の人たちに羨ましがられるくらいには・・・。買い物やエステ、食事、たまに二人で飲みに行くときもある。うちのお母様、服のセンスがいいから（てか安くても可愛いのが得意）二人だと気を使わないし、（親子だしw）言いたいことお互いに言うし、下手したら友達という時より楽w

しかし、この親子見た目も中身も全然似てないがために、何度『お友達』に間違われたことか・・・。うちのお母様は背が高くてスタイルがいい。まあ。ちょっと胸とお尻に物足りなさがあるが・・・（本人ちよっと気にしてるので言わないけど）逆に私はそこまで身長も高くないし、むしろチビだ（T-T）スタイルは・・・ふつう？胸は母よりはあるな確実に（、＼、＊）

お母様の性格は、まあぶっちゃけ、そこら辺の男より男前よ（＊一＼一）ゝサッパリ、バツサリって感じ。何度お母様に泣かされ、貶された部下たちを見たことか・・・。（ごめんなさい。助けら

れなくて。『触らぬ神に祟りなし』ですよw)

周りの人曰く、『キャリアウーマン』、(一応うちは共働きなので)『運動神経抜群』(そりゃあ、お母様スポーツの特待でしたから)『男女関係なくモテる』(ええ、今だに母の誕生日には仕事場やら近所やらから紙袋一杯にプレゼントのお持ち帰りですよ)『若い』(まあ、二十歳で産んでるし、若いわな)『かっこいい』(うん、グラサンかけるとどこぞの○ク○だと思っけどね)『行動力が半端ない』(あゝ、確かに。見てるこっちがヒヤヒヤすること平気でやるからタチ悪い)『怒らすと危険』(もう、即座に避難命令だね。出来れば、その時の母には遭遇したくない)『腹黒い』(いや、どっちかっていうと、正直に物事いい過ぎなんだよね。しかも相手の痛いところばかり言うから・・・って、これってやっぱり黒いのか?うーん?)

そんなお母様には数々の武勇伝があるわけで・・・まあ、この話はまた今度にして、私の性格は、うーん、『事なかれ主義』?でも、『トラブルに巻き込まれ体質』、友達曰く『苦勞性』、『白猫被った黒猫』、『面倒見はいい』、『冷静』、『めんどくさがり』『黙ってればどこぞのお嬢様』etc.・・・って、またんかい!!え?何これ、なんか意味分かんないのが何個あるんだけど。特に最後らへん!!・・・悪かったな、中身こんなんで。

と、まあ、こんな感じである意味逆である意味相性いいのさ。そんなこんなで、今まで上手くやってきてた人生だったのに、まさか、こんな事になるなんて思いもしなかった。ってか、想像出来るわけねえーだろうがっ!!!

prologue (後書き)

はいっ！初投稿です♪今まさにテスト期間中にも関わらず、書いてしまった私はもうダメです。明日のテストは無残な結果となって終わるでしょう・・・シャレにならない！！！！

A f i r e (前書き)

ダークになってしまったような、そうじゃないような（ω；）
まあ、苦手な人はリターンでお願いします！！

特に、読んでも読まなくても次には差し支えないです。

A f i r e

バチバチっ　ゴウッゴウ　バチバチバチ　凄い音を立てながら、次々と燃えていく様を私たちはただただ見ているしかなかった。今まさに家の中が赤く、紅く、燃えている。私と母は目の前の光景をまるで夢かのように見ていた。周りにはもう火の海。体中が焦げ炭によって黒く汚れ、服の裾も所々焦げている。

「（これは、もう助からない、か）」

そう、どこか冷静に思う自分がいた。主に、火災で人が亡くなる原因は焼死ではなく、一酸化炭素による中毒死だ。物が燃えると各種有毒ガスが発生し、それを吸ってしまったえば意識障害がおき失神して、あっという間に火に巻かれる。まあ、中には失神出来ずそのまま焼かれ死ぬこともあるそうだが。

「（そういう状況にはなりたくないな）」

出来ることならば意識を飛ばして、いつの間にか死んでいた方が何かと楽だ。そんなことを考えながら、段々視界が煙で見えなくなってくる。これだけ、充滿していればいずれ身体は動かなくなるだろう。次第に頭がぼーっとしてくる中で、隣に居る母に意識を向かせれば、床に倒れるようにして動かなくなっていた。どうやらもう意識はないようだ。

自分も次第に意識を保てなくなってきた。瞼が重い。身体が床に向かって倒れていくのをスローモーションのように感じながら、隣り合う母と向かい合うようにして倒れこんだ。意識が少しづつ薄れ

て行く中で、顔の横にある手を必死に母へと伸ばす。なかなか言う事を聞かない身体にイラつきを覚えながら、それでも手を伸ばした。あと、少し……。あと少して、届く。意識を失う最後まで……。せめて、せめて、この世の最後まで……

「（最後まで、貴女と一緒に……。）お母さん。」

産んでくれた事に感謝を、私を変えてくれた貴女に敬意を、心から愛してくれた貴女に心からの祝福を。やがて、私は暗い闇へと意識を手放した。……。願わくば、来世でも共に歩める人生でありたい。と願いながら。

『近日多発的に発生していた連続放火魔による、放火された今回の事件では、消化に至るまで5時間もの間、家と親子二人（母と娘）を焼きつくし、犯人はこの放火を行った後、逃走中に車へ撥ねられ死亡。犯人のカバンの中からは今までの事件で使われていたと思われる品々と、犯行現場の記録が犯人の携帯や自宅のパソコンに残っていたことから明らかとなっています。なお、……。今回の事件での被害者である親子は、手を繋ぎ、まるで寄り添うように亡くな

っていたとのことでした。』

A f i r e (後書き)

ふふふ。今日でテスト終わりでーす♪

あ！レポートが一つ残ってたwwやべっw

えっ！！しかも、4000字ですかwwしかも、必修科目ですかw

あははは(ノ△、；)

What? Nymph?

「えっと（ω；）・・・・・・・・ここ、どこ？」

つい先ほど目覚めた私は、なぜだか自然あふれる森の中におりました。ええ！なんか知らないけど、『某も○○け姫』なみの自然なんですが。ちなみに、すぐ近くには湖がある。私はこの側に倒れていたみたいだ。それにしても、私はついさっき死んだはずでは？ってことは、ここは天国？・・・・・・・・なんか、めっちゃくちやイメージとかけ離れてるんですが。

そして、この私の隣で今だ寝ていらっしゃる方はどなたなのでしようか；・・・・・・・・見た目の年齢からして、十代後半かな。うん、身長は寝てるから分からないけど、高そう。肌なんか白くて綺麗だし、背中まである黒いストレートの髪も艶がある。まつ毛も長いし、眼は分かんないけど、鼻筋の通ってる整った顔をしている。なんか、気の強そうっていうか、クールで強い感じのイメージ？かな。てか、この人なんかうちのお母様のイメージがあるなあ。・・・・・・・・って！！！！

「お母さん！！！！どこ！？」

ここが天国なら、私と一緒に死んだお母さんもここに居るはず！探さないと！・・・・・・・・うん？待てよ？今、自分の声に違和感があったような・・・・・・・・。しかも、異様に声が澄んでいて、ちょっと高めの声が・・・・・・・・。

「いや、まさかW・・・・・・・・（え？）」

「・・・・・・・・うーん（ノω||、）・・・・・・・・なに、さっきからうるさい。お

母さん昨日まで夜勤だったんだから、もう少し寝かせてよ。・・・
後10分したら、買い物行くから。その間に準備しときなさい、葬。」

一人騒いでいると、うるさかったのか、今まで寝ていた少女が起きたようだ。が、私は少女が今言ったセリフに思わず固まった・・・。

「え？今葬って言いしました？・・・てか、その話し方。・・・もしや、お母さん？（ノ、＼、；）」

「んあ？なに、当たり前のこと聞い・・・て？」

はい、フリーズ。セリフの途中私に向き直った格好のままで固まっております。うん、でもね、なんとなくなんだけど、この少女は間違いなくうちのお母様だ。私の勘がそう言ってる！つか、なんでお母さんまで固まってるのさ。私はお母さんみたく変わったところなんて・・・いや、そう言えば、さっき声に違和感が・・・。

「（まさか（；、＼、））」

私はすぐそばにある湖に寄り、自分の姿を映した。そして、そこに居たのは・・・

「え？ええええええええええ！！！！（ちよっ！これ、ホントに私かっ！？）」

お母様（と思われる少女）と面影を同じくした、これまた違うタイプの美少女がおりました。

水面に映る私は、これまた十代後半。どちらかというと、可愛いより美人さんで、優しそうなお姉さんって感じ。お母さんはなんか中世的でクールな美人さんです。同じ黒い髪はお母さんより長くて脚の太ももくらいまである。

眼も同様に黒いが、お母さんはちょっと切れ長、私は前よりちょっと大きくなった眼にパッチリ二重は健在です。お肌なんて、色白のツルピカのスベスベですよ！しかも、私的にはこれが一番嬉しい！なんと、身長が伸びてるうゝ・・（＊ノ＼ノ）・・さっき、お母さんと並んで立った時に気付きました b

母..170？

私..167？

およその身長の高さだけど、前より見上げる高さんが縮んだだけ嬉しいw前はかなり身長差があって大変だった；特に自分の首が←←今は3センチくらいの差しかないのがうれしいw

さて、自分の状況判断がついた処でお母様に自体の説明をしないとね。・・・。

えっとー。まだ、固まったままなんですか？；お母さん（ω、；）

Welcome to the different world

とまあ、先ほどはあまりの状況に取り乱してしまったが、取りあえず母の化石化を解いて、私が葵であることと、自分も姿が変わってるのをさっきの湖で同じく確認してもらった。そして、今はこの状況の確認をしているところである。

とりあえず、今私たちが居る所はホント『某も○○け姫』そっくりな場所で、ちょっと開けた場所に、あまり大きくない湖がある。私たちはその湖の岸近くに居たわけで、この開けた場所をぐるっと周りを沢山の木に囲まれている。そして、私には今気になることが一つあるのだ。それは……

「あのさあゝ。さっきから気になってたんだけど……その、お母さんの側にある大きなカバンなに？」

「ああ。……なんだろうね。」

「……………」

「(；´Д｀)」↑(思わず言葉にできない想いが顔文字になってしまったw)

「まあ、開けてみたら？」

「そうだね；(そして、私が開けるのか；)」

私は立ち上がると、母の側にある大きな黒いカバンをズルズル引きずりながら、自分たちの真ん中に置く。つか、このカバン重すぎる；何が入ってんだよ；

ジーーーーッ。

カバンのジッパーを開け、中身を見るとなにやらゴチャゴチャと色々入っていた。まず、私は一番上にあった白い、なにやら分厚い封筒を取り出した。

「なに？　なんかの書類？」

「さあ？」

そして、白い封筒からA4くらいの用紙が軽く30枚くらい入っていた。しかも、なにやら私たち宛に細かく何か書かれている。

「（うわっ；読みたくなる量だな；）」

しかし、状況が状況なだけにそう云うわけにもいかず、黙って読むことにした。私が最初に読んで、それを一枚ずつ母に渡しながらの、流し読みをする。そして、最初の文章から読んでいく。

『拝啓 みなづき 水無月冬美様 あおい 葵様

この度は、こちらの責任で貴方がたお二人が死亡してしまうという重大故に発展してしまったこと深くお詫び申し上げます！！真に申し訳ありませんでした！！！！

今回は想像以上の被害がでてしまった為に、手が回る者もいず、このような書面でのお詫びをお許しく下さい。まず、何故このような事態になったかといえますと・・・・・・（中略）・・・・・・ということでした、本来なら輝かしい未来を歩むはずの水無月様たちの未来を奪ってしまったこの件で、その修正に神一同が全てで払っておりまして、未来を奪ってしまった責任といってはなんです、今居る世界で新しい人生を歩んで頂きたいです。

なお、この世界は水無月様たちの世界とは違い、多少危険な世界ではありますが、その分命の保証が出来るほどのオプションは付けさせて頂きますのでご安心ください。詳しい説明は、黒いカバンに入っているグレーの本と白い本2冊の合計3冊の本を参照してください。・・・・・・（以下略）・・・・・・。では、今後のご活躍に幸多からんことを心よりお祈り申し上げます。

敬具

神一同 』

グッシャ……。読み終わり、思わず力んでしまったのは仕方のないことだろう。

「ふふふ。（今度、会った時は……。w）」

「……。やれやれ。（どんまい。）」↑（遠い目）

「お母さんもやけに冷静だねー。」

「騒いでもしょうがないでしょ。もう、死んじゃったんだし。それに、お父さんたちの事も面倒見て貰えるみたいだから、別に不満もないけど？逆に肩の荷も下りたから感謝してるけど。しかも、もう一度人生やらせてくれるみたいだし、若返ったし、しかも美少女にこれからある意味楽しみじゃない？人生楽しまなきゃ損よ？これは、今まで頑張ってきたお母さんへのご褒美よ♪ご褒美♪」

「……。そうだね。お母さんってそんな性格だよ。相変わらず、図太い神経してるよね。ホント（呆）」

「失礼ね。前向きといいなさいよ。」

「へいへい。」

はあ、とりあえず言われた通りグレーの本と白い本を探すかな。

（一八一）—3

Outlook on the world

とりあえず、状況確認がおわったところで、今また例の黒いカバンをガサゴソ、ガサゴソ、と漁りまくりです。そして、やっと見つけた手紙にあった三冊の本。

革張りで、グレーの本には『これ1冊あれば大丈夫!! 初めての異世界での過ごし方? 587042 サウリ編』（日本語ver）『? サウリ』つまりこの世界が? サウリ』というらしい。しかし、なんなんだこの「旅行ガイドブック」のようなタイトルは・・・。
もう一方の白い本2冊はどうやら母と私用に1冊づつらしい。なぜなら、本の表紙に思いつき『水無月冬美 様』『水無月葵 様』と書いてあるからだ。それより、早く読まないとい日が暮れる。

「んじゃ、まずはグレーの本から見ようかな。お母さんも一緒に見る?」

「ん? んー、お母さんこっちの白い方読んどくからいい。読み終わったら言って。」

「うい。(＊ー▽ー)ゞ」

そう言う事で、私と母は湖近くの木に寄りかかり二人して本を読み始めたのだった。

えっとー。なにに。『ここは? サウリ』と呼ばれる・・・（以下略）・・・』

あー。要はまとめるとだ! この世界? サウリ』には代表する国が6つあり、その国を中心に細々とした小国や集落なんかいくつもあ。その代表的な国にはそれぞれそこにしかない産物があつて、そのお陰か6つの国がお互いにお互いを助け合う。という均衡が保た

れている為、国同士での争い事はない。

しかしその代りなのか、近年稀に見る程の魔物やモンスターなどが大量発生している為、どこの国や村でも厳重警戒態勢が取られているようだ。（つか、なんでそんな最近の情報まで書かれてんの？この本；）ちなみに、各6つの国の特産物は以下の通りだ。

・サルティマ国

緑に囲まれた自然豊かな国のため、さまざまな食物の生産が行われている。他の国に足りない食物やその食物から健康や美容に良いとされる物を多く輸出している。また、その国のみでしか生産できない「カウチ」という高級食材があるのもこの国ならではの。

・バルテリーナ国

水資源が多く、一年中暖かな気候を持つこの国では。湿気や暑さ、寒さ、に弱い植物や薬草が多く採取できるため、医療の発達に特化した国である。主に、医療の派遣や薬草の輸出を行っている。

・アルカリネ国

二つの大きな山に囲まれた国で、そこから採れる魔石は魔術師や各国の鍛冶屋やに人気がある。また、夏には「ガルセ山」冬には「セルジ山」に入ることによって採れる珍しい魔石「虹石」が手に入る。しかし、この時期の山は正に地獄であるので、手に入れることは中々難しい代物である。主に、鍛冶屋の名手の派遣や魔石の輸出を行っている。

・フォルタス国

周りを雄大な砂漠に囲まれ、大きなオアシスを中心としたこの国では。崖などの絶壁も多く、そこから多くの鉱物が掘られ、様々な武器や装飾品として生産、輸出されている。また、稀に珍しい鉱物が採れるため、武器職人や冒険者に人気が高い。しかし、何時、何

処から、何が出てくるのか分からないため、危険度もそれなりに高い。

・ソルファン国

海が近く、漁業が盛んな国で、主に魚介類や海から獲れた白玉や紅玉を輸出している。「白玉」や「紅玉」は「魔石」とは違い、魔力濃度が高い。また使い捨てになる「魔石」とは違い、持ち主の魔力を『保存』しておける性質を持っている。その為、この二つの玉は高値で取引される。

・セルビナ国

一面銀世界であるこの国では、主に、「氷結石」や龍の血液が固まって出来た「紅血石」

どちらも、この国のみの生産なので、高値で交渉される。そして、「オーロラ草」と呼ばれる珍しい薬草が採れ、こちらも高値で取引されている。また、ここでも「虹石」を採れ、尚且つ多く採取できるのだが、その分危険度が大幅に増すため、冒険者でもなかなか挑戦するものは居ない。』

次はお金やモンスターや役職などについてです。

O u t l o o k o n t h e w o r l d (後書き)

あう；レポートが終わらない←←

O u t l o o k o n t h e w o r l d ? (前書き)

拙い文章能力しかなくて、ホントすみません。。(＊ノ厶ノ)
変な表現があっても、華麗にスルーしてやってください；
。

Outlook on the world ?

えー。なにに、今度は種族ですか。

『？サウリ”には人間、精霊、エルフ、獣人の4種がある。ここでは人間と獣人が多く、エルフは他との共存を好まないので、滅多に人里に下りてこない。しかし、エルフ族の知識と薬は希少とされ、重宝されている。精霊に関しては、精霊を見れる者が少ないため、現在物語の中の存在として扱われている。なお、光属性の者や稀に高い魔力を保持している者には見えることがある。』

はー。精霊とか居んのか、ここ；まじ、異世界。えっと、次は貨幣とギルドについてか。

『この世界の貨幣はすべて統一されており、金額の高い順から晶貨、金貨、銀貨、銅貨の4つがる。なお、一般庶民（家族4人）の1カ月の生活費は食費含め、銀貨30枚。収入は銀貨40から50。』

軽く計算すると、銅貨が約10円、銀貨が1000円、金貨が10万、晶貨は1000万。つまり、

銅貨×1枚∥10×100∥銀貨1枚

銀貨×1枚∥1000×100∥金貨1枚

金貨×1枚∥100000×100∥晶貨1枚

晶貨×1枚∥1000000

うわっ！！晶貨で家が建つよ；恐るべし。

ちなみに、一人暮らしの場合を計算すると、外食をするにあたり一食銅貨10枚。の2食分で1日の食費が銅貨20枚。×1カ月を30日として、1か月の食費が銅貨600枚（即ち銀貨6枚）プラス雑貨や日用品に銀貨1枚とすると。

銅貨10×2＝20×30＝600枚プラス銀貨1枚＝銀貨7枚

これの4人分は銀貨7×4＝28枚。贅沢をしなければ、約1カ月銀貨30枚あれば余裕で暮らせる。一食が100円とか良すぎるw

『次にこの世界で働くには何処に行っても、まずはギルド登録を行わなければならない。ギルド登録とは、己の職業証明書と同時に自分の存在証明書にもなるので、住民登録の代わりにもなっている。』

なお、この証明書は10歳から登録可能になるため、親が居ない孤児やストリート・チルドレンのような子たちも働くことが出来るようになった。

そして、現在ギルドには様々な職業があり、希望の職業を選択後各部署での登録を行い、クエストを受けるなり、店を始めるなり、弟子入りするなり、できるようになる。

なお、各職業にはそれぞれランクが付いており、ランクが高い順からS，A，B，C，D，E，Fに並んでいる。ランクが高ければ高いほど、依頼の難易度や報酬が高くなってくる。

ランクを上げるためには、各依頼の数をこなすか、上のランクの人からの試験を受け合格する事であることがある。また、冒険者のみの特例として自分のランクより高いモンスターを3回倒すことが出来れば、そのモンスターのランクと同じランクのライセンスをもらうことが出来る。』

ああ、あるほどねえー。とりあえず、これくらい覚えておけばい

いかな？あと、ここの場所と近くの村か国かを探せばいいや。

「つと、まだ、最後になんか書いてあるな。えー。なにに。『白い本は読み終わると同時に契約が終了し、人手に渡らないようにするため、即座に爆発します。』……え？『バフンッ！！！！』うえ！？」

O u t l o o k o n t h e w o r l d ? (後書き)

なかなか、先に進まないな；

M o t h e r ' s n e w p o w e r (前書き)

お気に入り登録してくださった方、本当にありがとうございます。
これからがんばって書きますね b

「……ちよつと、葵うるさい。」

「え？……あれ？お母さんだ。」

「は？私があんたのお母さんじゃなかったら、何なのよ？」

「え、いや。……って、それよりも、これどうなってんの！？」

母の質問をスルーして、今日の前に居る黒髪美男子に勢いよく指をさした。

「どうなってるも何も……見たままだけど？」

「いや、どう見ても分かんないから。聞いてるんだけど……」

取りあえず、最初から説明プリーズ！！」

「えー。なんかめんどくさい。」

「（それは、私のセリフだあああ！！！！）」

と、なんとか母に説明させて、簡単にまとめるとだ。

本を読んだら、なんか細々とした設定を頭の中で組み立てることに
なり、何も書かれていないページへ記録。何個か質問に答えながら、
最終話まで行く。

そして、今までの結果がとたんに表示され、余りにでかい力が表
示されてしまったので、今私の前に居るこの美男子君が母の武器と
なり、力の制御もする役割となって出てきたというものらしい。ち
なみに、本来の姿は日本刀らしく。その人の魂の本質と力に影響さ
れて形作られるものらしい。つまり、使用者が死ねば、その刀も同
じく消滅する。

……えつと、『某B1○○○h』の『斬○刀』ですか？確かに、
うちの家族ってみんなしてアニメとか漫画好きだけど、『某B1○
○○h』まで知ってるとは……；ってか、漫画の能力でもあり
なんですかwwちよつとwチートだわw

「んで、その刀はいいとして、他にはどんな能力があんの？」

「あー。お母さんもよく分かんなかったからくれるってもの適当にもらってきちゃったwえへっw」

「・・・おいおいおい（えへっじゃねえー；）自分の力把握してないのかよ；」

「だって、あの本質問多すぎ。・・・あとね？ニッコリ」

「（（（；。D。））！？」

「葵ちゃん？あなた、女の子なんだから言葉遣いはちゃんとしましょうね？（黒笑）」

「は、はい！！（しまった；つい口に出してしまった；）」

うちのお母様は昔からお行儀には厳しいのです。自分だって、時々悪くなるくせに！！

「何か言った？ニッコリw」

「いえっ！何も言っておりません！はいっ！！」

「そう。それならいいのよ。・・・それならw」

「プルプル（（（。D。；））プルプル」

私今確実に声に出してないよねえー；なんでえー！！

「さあ。なんでかしら？w」

「ノ——（ノ）。D。（、）——！！」

L e t ' s g e t p o w e r f r o m t h e b o o k .

(前書き)

今回、皆様には重大なお知らせが・・・。

なんと明日って、もう今日ですけど、これから一カ月程中国に行ってきます!!!!

予定日としては29日か30日くらいには帰って続きを書きたい
b

Let's get power from the book.

「まあ、お母さんのことはいいから、あんたは自分のことしなさいよ。早くしないと日がくれるからね。」

「（一体誰のせいでこんなに時間がかかったと）「何か言った？w」何も！！！」

あれ？デジャブ☆

涙ながらに、自分の分の本を手にとり、読んでいくと。あら、不思議。頭の中にどんな文字が浮かんで消え、何も書かれていなかったページに何やら読めない文字で記録されていく。しかし、ホントにこれ質問が多い。ちなみに、どんな質問があったのか。少しご紹介しよう。

【どんな能力をご希望ですか？】

自分がチートだと思うような能力が希望です。

【前線と後方支援どちらがお好みですか？】

両方出来ればいいことないですね。

【あなたの思うチート能力とはなんですか？】

なんでもありな能力かなー。

【魔力があるとしたら、どうする？】

そうだなあー。けた外れの魔力量と完璧な魔力操作で魔法なんてスイスイ♪と出来ればいいねw

その他、様々な質問をされた。【好きな食べ物】から【好きなタ

イプ】の質問まで……。そんな質問してどうするんだか；そして、20分後……

【総合結果】

能力名〈Infinite creation（無限創造）〉

〈Ability to do transformation

ion（変換能力）〉

〈Inquiry and storage ability

ty（探査と記憶能力）〉

〈Projection of imagination

（想像の投影）〉

〈Multiple ESP（多重能力）〉

〈Infinite space（無限空間）〉etc.

制約…能力の悪用や世界の崩壊（脅威）と判断されし時は全ての神より制裁が下り、魂ごと消滅し、二度と生きること転生することもかなわなくなる。

スキル…「創造神の加護と祝福」「精霊の信頼」「月の加護」「世界の祝福」「母の愛」

と、まあ。下にも色々書いてあるけど、重要そうなのはこんだけぽかったからいいやw

「んー。チートww」

その後、【完了しました】と表示されたと同時に私は勢いよく本を空へぶん投げた。そして、「ボンッ」と爆発する本を眺めながら、

したり顔をしてやったww

「、（ー、）ノ フッ」

「ちょっと、なに遊んでんの。今後どうするか決めるんだから早くしなさいよ。」

「ほーい♪」

さてと、やっと自分の能力を把握したところで・・・ちょっと使ってみよう。

「お母さん。話し合いの前にさ、ちょっとお母さんの能力検索させてもらっていい？」

「えー。もう夕方だからご飯食べてからにしてよ」

「すぐ済むから！！それに、お母さんも自分の能力分かった方が安心でしょ！」

「・・・はあ。早くしてね」

「せんきゅーw」

さてさて、お母様の能力は何かなく♪

「対象物…〈お母さん〉《探査》発動！」

〈Inquiry and storage ability（探査と記憶能力）〉は見たり触ったりしたモノの詳しい情報を取り出すことが出来る。ちなみに、どういう仕組みかっていうと、どうやらこの世界にはそこら中に魔力が満ちていて、空気みたいな感じなんだよね。だから、この世界に行きとし生けるモノたちが纏う魔力から《対象者や対象物》のみの魔力を解析することで、魔力からの記録を読み取っているというわけなのさw

魔力はいつ何時でも身にまといてるものだからねwふふふ。魔力

は云わば「記憶」に等しい。もちろん膨大過ぎる情報量になるから基本的にはプロフィールくらいにしかしない。てか、引き出した量だけ私の魔力も消費するからプロフィールくらいで十分でしょw

といっても、それなりの魔力量なんだけどねwwつと、結果がでたぞ。どれどれ？

『対象者…水無月冬美

年齢…生前↓42 現在↓18

身長…170センチ

体重…5「言ったらダメよw」「はいっ（ノ、；）！！」

【能力】

〈physical strength（最強の身体能力）〉〈

〈Wall of invincibility（無敵の壁）〉〈

〈Ability to do transformation（変換能力）〉〈

〈Creation ability（創造能力）〉〈

〈Magiceyes（魔眼）〉〈

〈Rupture（断絶）〉etc.

制約…能力の悪用や世界の崩壊（脅威）と判断されし時は全ての神より制裁が下り、魂ごと消滅し、二度と生きること転生することもかなわなくなる。

【スキル】

「全神々の祝福」「精霊の親愛」「太陽の加護」「世界の祝福」「娘の愛と加護」』

「あのさ、これ完璧にチートじゃね？つか、最強だろ；なに、無敵の壁って、断絶って；」

「まあ、身の安全はあった方がいいじゃないw便利みたいよwこの壁。たとえば、背後から攻撃されても無意識に術が発動して防いじゃうみたいだからw『魔眼』は今の魔力量が倍になるみたい。ついでに、スピードも力も倍だって。『断絶』はありとあらゆる対象を問答無用に一刀両断しちゃう能力ねw」

うん。ここで教訓を一つ。【何があろうとも、何が何でも、母を敵にまわすべからず!!!】

なに!!!この地味に無敵すぎる能力は!!!『魔眼』とか卑怯やろつ!!!『断絶』って、まさにどんな攻撃も全部一刀両断叩きのめす能力ですか(――;)この新しい教訓は忘れたらいかんね。うん。

D i s c u s s i o n i n t h e f u t u r e (前書き)

遅くなりましたWやっ
と帰国致しましたW
W

Discussion in the future

「今後どうする？『ズルズル』モグモグ」

「そうねえー。『ジュルジュル』モグ。とりあえず、食糧やお金に今のところ困ってないし、近くの村か町にでも行く？」

「『ジュルッジュルジュル』『ゴクゴクゴクッ』ゴックン！ぷふあっ！！賛成。でも、まさかあのカバンにあんなに食糧とお金まで入ってるなんて思わなかったw」

「確かに。食糧も自分たちで探さないといけないかと思っってたから助かったわw」

母の能力検査をしたあと、二人してまた例のカバンの中身を調べていたら、出てくる出てくる。大量のカップ麺やお菓子やら日本の調味料の『さしすせそ』など様々な食糧が。さらには、お金まで入っていてビックリ。しかもこれがまたとんでもない額なのだ。晶貨10枚金貨100枚銀貨500枚銅貨1000枚も入っていた。軽く計算しても一億くらいにはなる。

「（つか、よくこんなカバンに入ってたな。入ってた量を考えても明らかに全部入る量じゃないだろう；）」

そりゃあ、ご都合主義ですのでwあしからずw

「（いいんか、そんなんで。）」

いいの、いいのW難しく考えない、考えないW人生楽しくだよ？
なに、例えちよつとした不幸なんかおきても、屁じゃないでしょう。
今後もがんばっ♪

「(お前に、そない言われとうないわ!! お前が作った設定だろう
っ!!)」

ちよっ; 気をつけないと方言でてまっせ; お嬢さん。ほら、標準
語、標準語♪

「(むかつくわ! この作者!!)」

ひっど(ゝ; ㇿゝゝ) こんなに頑張っているのに! ひどいわっ!
葵ちゃん!!

「(あー。もう、めんどくせ。放置だ放置。)」

のおおっおおお!! 放置はいやー!!!

作者はほっというて、上のつづきだが。とにかくあのカバンを持ち
ながらこの森をさまようのは危険だと判断し、各々の能力を駆使し
て持ち運ぶことにしました。もちろん食糧や水、お金なんかを半分
づつにわけて持つ。こちらの方がもし、ばらばらになった時なんか
に食糧やお金に困ることがない。

ちなみにどうやって、収納するかというと。私の場合、《検査と
記憶能力》についてる《コマンド機能》と《無限空間》を利用させ
てもらった。基本私の能力はコマンド表示(しかも、解説付き)で
ある。おかげでこんな私でも混乱することなく、自在に能力を操る

ことが出来ているのだ。そのコマンドに収納BOXを新たに作り、《無限空間》で各ジャンルに分けて空間を創り、ぽいっと入れてしまえば。はい、収納完了♪あとは、好きな時に欲しい物をコマンドの収納BOXから取り出せばいい。空間の中は時間が止まっているので、食べ物やモノが腐ったり、錆びたりすることはない。

「（いやあwホントに便利だわ。荷物いらず、財布いらず♪）」

母の場合。一見ただの腕輪にしか見えない銀のシンプルなブレスレット。これ、実は母の斬魂刀である。ブレスレットになったのは力の制御とコントロールがしやすいからだそうで・・・；しかも、収納も兼ねているから、母の管理するモノはほぼこの刀が担っている。モノを出す時は念じるだけで出てくるようで、とても便利である。

「（斬魂刀でこんなこと出来る人なんて母さまくらいなものだな；）」

斬魂刀が母の力を制御しているのは、単に《魔眼》のせいで魔力が2倍に増大するのを防ぐためと、たとえ発動してしまっても、コントロールしやすくするためだ。普段の魔力量なら、私たちはほぼ変わらない量を持ち合わせている。少し私が魔術師20人分多いくらいだ。しかし、母の《魔眼》が発動すれば私の魔力量を軽く越してしまうので、そのコントロールを含めての、今回のブレスレットになる。

「それじゃあ、ここから一番近い『ポア村』にでも行こうか。流石に、ずっとここには居られないし。ついでだから、この国の観光で

「もうようよW」

「そうね。とりあえずここから出ないことには何も始まらないし。今後のことはまた『ポア村』にでも行ってから考えようか。」

「ついでに、その『ポア村』でギルド登録しちやえば、何処に行っても問題はないしね。」

「確かに。でも、今日はもう日が沈むし、今行動するのは危険だから『ポア村』は明日にしようか。」

L e t , s P O A V i l l a g e (前書き)

更新が遅くてすみません；

Let's POAVillage

「そうだ、昨日言い忘れてたけど、あんたお母さんのこと、今まで通りに読んでたらずぐ疑われるわよ？」

「?（＊。＼＊）ハッ!!ど、どうしよう;」

「普通に名前で呼びなさいよ。『お母さん』なんて同い年が言い合うわけないでしょう。」

「確かに・・・。」

「・・・・・・・・。葵って時々しっかりしてるのかそうじゃないのか判断に困る時があるわね;」

「むっ。お母さんも私の事、あんまり子供扱いしてるとボロが出るからね!!」

「・・・・・・・・。それはしょうがないじゃない?葵は私の子なんだし。」

「それはそうだけど、今は私たち同い年なんだから。そんなの可笑しいじゃない。気をつけてよね。」

「・・・・・・・・。まあ、努力はするわ。葵も気をつけてよ。」

「分かってる。」

そんなこんなで、朝から討論を交えつつ森の中へと入っていった。

5時間後・・・・・・・・。

「ねえー。葵、何時になったらポア村に着くのかしら。」

「うーん。あと2時間くらいで着くと思うんだけどねー。この地図によるとあと少しだからそのくらいじゃないかな。」

現在私たちはポア村を目指しながら森の中をさまよい中である。

今使っている地図も例のカバンに入っていたものの産物の一つだ。

「(神様。ホント準備いいよね・・・。)」

しかも、この地図。ただの地図ではない。この私が初めての魔法を駆使して作った「ハロー○ッター」の『「忍びの地図」(M a r a u d e r' s M a p)』を参考にして作ったものだ。といっても、ほぼ「忍びの地図」そのものののだが。

「(だって、いちいち考えるのめんどいじゃない？ ああ！！地球人でホントに良かった♪技をパクリまくりよww)」

使い方はほぼ同じ。違うところっていったら、呪文が必要ないってことかしらね。呪文じゃなくて私たちの魔力に反応するように作ったから。地図に魔力を少し込めれば組み込んだシステムが認証してくれる。これも私たちしか使えないようにしてある。やたら何でも便利なモノを作っちゃ世の中大変なことになるなんて、考えるまでもないわよ。

「(しかし、ホントこの森何時になったらでられるのやら；)・・・ん？」

「どうかした？ 葵」

「んにゃ。なんかここから北に500mくらいに人影2つ発見。・・・しかも、何かに襲われてるみたい」

「それを早くいいなさいっ！！行くよ！！」

「・・・はあ。はいはい。」

「（ああ！どうしてこんな事になってしまったの！）」

「おねえちゃん！！」

「マチ！お姉ちゃんの後ろにいなさい！！」

「でも・・・。」

『グルルルルッ』

「「ヒッ！！」」

私たちが現場に着く時には大型の気味の悪い犬らしき生き物が、
今にも女の子2人に襲いかかるところだった。

「ちっ、ここからじゃ間に合わない。」

母から思わず出た舌打ちに、私も他に何か方法はないかと頭を回
転させる。

「（何か、何かこの距離でも届く攻撃が・・・。）」

そう考えながら、ふと母の着けているブレスレットに目がいく。

「・・・これだっ！！！ちょっと、お母さん！そこどいて！！」

私は母を目の前からどかせると、左手に魔力を集中させる。それを
形状変化させ、属性を水にし、青白い弓を模らせた。云わば「○
リーチ」の白い眼鏡君のアレである。

標的は全部で8匹。目標までの距離150m。

「（イける。まあ、数撃ちや当たるだろ。）」

私は目標を見定め、勢いよく弓を引き、化け物に向かって数百もの弓矢を放った。

もう、ダメだと思った。ここで私たちは死ぬのだと漠然と思ってしまった。そして、モンスターが私たちへと牙を向けた時。妹を後ろに庇い、来るであろう衝撃に耐える為に目をつむった。

しかし『ズシャッ』という音とともに私たちに迫り来ていた影が突如として消え、次に「ドサッ」っと何か倒れる音に目を開ける。

「これは・・・一体。」

私が目にしたのは、何か青白い細い何かがあり得ない数で次々と目の前のモンスターを射抜いていく姿だった。突然のことに私と妹が呆然としつつも、助かったことだけは理解できていた。

「（一体誰が・・・）」

いち早く正気に戻った私は周りを見渡す。そこで見つけたのは、変わった弓のようなものを構えている女性とその傍らに佇むもう一人の女性がいた。

「（あの人たちが?）」

「ふー。なんとか間に合った。」

私は弓を消し、周りを見渡した。そして、襲われそうになっていた女の子たちのところへ駆け寄り、声を掛けようとしたところで、背後からモゾッと動く気配がした。

「葵!!」

母の呼び声を聞きながら背後へと顔を向けたところで私に向かってくる化け物の顔が物凄く近いところにあるのに気付き、とっさに動くことも出来ず、固まってしまった。

『ブッシャ』

しかし、化け物は私を襲う前に身体を真っ二つにされ、倒れていた。

「葵っ!! 怪我はない!？」

母が私へと駆け寄り、私に怪我がないと知るとほんと安心してようやく顔を緩めた。そして、母の手に握られている刀を見て、あれは母がやったのだと知った。

「急いで駆け寄る気持ちは分かるけど、きちんと死んでるか気配を
読んでから駆け寄りなさい！」

「・・・はい。」

「まあ、今回はしょうがないけど、次は気をつけてね。」

そう、声をかけると母は私の後ろで今だ固まったままの女の子2
人に顔を向けると、へたり込んでいる2人に合わせて自分もしゃが
み、脅えさせないようにやさしく声をかけた。

「貴方達も怪我はない？」

そう、声をかけてきた人を真近にみて今度は違う意味で固まるこ
とになってしまった。

やさしく声をかけたにも関わらず、またも固まってしまった2人
を見て思わず困惑の表情を出す母を横目に私も2人に視線を戻し、

とりあえず何処にも怪我をしていないことを確認する。まあ、見える範囲でしかわからないのだが、本人たちが固まっている以上何も出来ない。そして、そのまま固まる2人を放置しつつさっきまで襲い来ていた化け物をみてある事に気付いた。

「（これって、魔結晶？）」

倒した化け物の側には数多くの結晶が散らばっていたのだ。しかも、色形など様々な種類が転がっている。ちなみに「魔結晶」はその名の通り魔物やモンスターなどの体内で蓄積された魔力の結晶である。魔物やモンスターなどを倒した時に体内で蓄積された魔力が外気に触れることにより結晶化され、魔石とは違い、様々な用途で使われる。

例えば、戦いでの魔力補充や薬や薬草の調合、魔石への魔力充電などがあげられる。ちなみにこの魔結晶も売ることができる品物である。色により属性を判別し、形大きさを魔力の質や量を見ることができる。その為値段もまばらだ。

しかし、何点が一つ。とても便利な結晶ではあるのだが、魔物のレベルにより、大きさが異なるためなかなか全部を集められる者はいない。しかも、この結晶人が触れずにそのまま放置されればそのまま空気へと溶け、周りの魔力と溶け合ってしまうのだ。だが、ぶっちゃけそんなこと私の知ったことではない。

「（とりあえず、全部集めておこう。）アクション！（Accio）（来い）」

呪文を一つ唱え、魔結晶を一瞬で集め終え、自分の収納箱へと収納する。

「ほんと、便利。つくづく思うけど、色々と反則だよねw」

「葵；この2人まだ固まったままなんだけど；」

「えっ；まだ、固まったままなの？（おいおいおい；どんだけだよ（ω、；）」

L e t , s P O A V i l l a g e (後書き)

戦闘シーン難しいよおおお!!!

L e t ' s P O A V i l l a g e ? (前書き)

えー。報告致します（´ω`；）

またも、更新が遅れることになりそうです。明日から実家に20日か22日くらいまで帰ってくるのでできません。（多分）

実家にインターネットがないので書けないんですよー←←

出来るだけ早く更新出来るように帰ってきますね！！

Let's POA Village?

「はぁー。いい加減正気に戻ってほくれないかな；（話が進まないからさ）」

「……………」

そう声をかけても意識を戻すことのない2人から葵は視線を少しずらし、黒い笑みを静かに浮かべると2人にしか聞こえないような声で呟いた。

「……。早くココから移動しないと、このモンスターの血の臭いで他のモンスターが集まってくるかも知れないわね（ボツソ）」

「「?」*(*)ハッ!!」」

ここに来てから初めてのブラック葵であった。それを静かに見守っていた母である冬美は一人頬に手を当て物憂げにつぶやいていた。

「誰に似たのかしら、こんなに腹黒くなっちゃって。」

それは、明らかに貴女に似たのでは？てか、黒くなったのは貴女のせいでしょう。確実に。

「（確かに葵は私の子ではあるけど、そんなに私黒くなんかいいわよ?）」

えっとー。貴女以前お歳暮を贈る為の御品書を定員さんに無理やり書かせてませんでしたか？

「（まああ。それこそ誤解だわ。私はただ『は？私が書くの？』って聞いただけじゃない。）」

その後のその一言で定員さんが即『あ、宛先のお、お名前は……』って泣きそうな顔して必死に御品書書いている姿をたまたま一緒にいた葵が物凄くすまなそうに定員さんを見て、肩身が狭い思いをしていた。なんてこの人は知らないのだろう。しかも、その後で事情を知った叔母には同情されるし、祖母にも苦笑され、「仕方がないのよ」なんて慰めのお言葉まで頂いているのだ。そりゃあ、捻くれて黒くもなるよね。

「（さて、誤解も解けたところで。）」

いやいやいやいや。解けてないよ？一体今までの会話の何処で貴女が黒くないなどと？

むしろ、葵ちゃんが腹黒くなった理由が分かっちゃったよ？……
・苦労してるんだね。葵ちゃん。

「（そうなんだよ！！分かってくれる？（T-T）もう、この人の行動で私がどれだけ生きた心地がしなかったことがあったことか……
・。）って、お母さん何やってんの！！」

「は？なにって……ナニ？」

「いやあああああ！！何、読者に誤解されやすいこと言ってるのよっ！！って、違うから！そのモンスターの残骸をどうするの。」

「ああ。なんか、あの子たちに聞いたらこのモンスターの皮やら牙やら持ち帰ったら売れるって言うからね。……てか、葵さっきからうるさい。もう少しお淑やかに出来ないの？ホントあんたの友達

が言ってた『冷静沈着』って言葉は当て嵌らないわね。どうして、そんな誤解が生じたのかしら？」

「（それは、明らかにあんたのせいだろうがああああ！！こんつのゴーイングマイウェイ！！）」

言葉にはしないものの、とりあえず正気を取り戻した2人へと顔を向け。改めて事情なるものを聞くことにした。

「（はあー。やぱり、何処に居たってお母さんはお母さんのね。トラブルメーカーは健在ですか。むしろ、これをきっかけに酷くなったりしないわよね？あははは。）」

そう、葵が危惧することが実は現実になろうとしているなんて、今の葵は知らなかった。むしろ、知ったところでこの人を止められるかと言えば・・・・・・無理な話だろう。

「それで、貴方達は何故こんなところであのモンスターに襲われていたの？」

「それが・・・・。」

まあ、簡単にまとめるとだ。病気がちな母のために姉妹で薬草を採りに来たはいいが、薬草採りに夢中になりすぎて結構奥深くまで来てしまった。そこで、ばったりとさっきのモンスターに遭遇。そこに現れた私たちに助けられたと。そういうことらしい。

「まあ、事情は分かったわ。ちなみに貴方達どこの村の者？」

この辺は村しかないから、すぐ分かるだろう。そう思っていたのだが。

「いえ、私たちは今ロロ町からあのポア村に滞在しているんです。だから、出身はロロ町になります。ホントは私たちの護衛役も居るのですが、どうしても、自分たちで薬草を持ち帰りたくて・・・振り切ってしまったのです。」

「・・・。」

「「（何やってんのー！！てか、護衛役しっかりしろよっ！）」」

この旅ではじめて心が一つになった瞬間であった。そして、よく話を聞いてみると。

「（ロロ町で）病気がちな母のために姉妹（護衛・従者付き）で薬草を採りに来たはいいが（森に入る際に巻いて来た）、薬草採りに夢中になりすぎて（森に嚴重警戒態勢が敷かれていることを知らなかった）結構奥深くまで来てしまった。そこで、ばったりとさっきのモンスターに遭遇。そこに現れた私たちに助けられた。という事らしい。」

「「はあああー。」」

思わず、ため息が出てしまうのはしょうがないことだろう。つか、護衛役よ。こんな小娘2人にどうして巻かれたよ；

「ここで、こんな事しててもしょうがないわね。取りあえず、ココから離れて、ポア村にむかいますよ。」

「そうね。貴方達も歩けるかしら？」

「はい。私たちは大丈夫です。あっ！私ったらまだお名前も御礼もいってませんでした。」

「そうでしたわ。お姉さま。」

「申し遅れました。私、名をクラリス・マリーネ・アルポートともうします。」

「私は、妹のマチルダ・マリーネ・アルポートです。」

「この度は、危ないところを助けていただいてありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

姉妹2人に丁寧な御礼を述べられ、ちょっと困った顔をしながら、私たちも名前を告げる。

「私は双子の姉で水無月冬美。こっちが」

「妹の葵です。こちらでは、アオイ・ミナヅキになるのかあしら。」

「そうか。じゃあ、私はフユミ・ミナヅキになるのね。」

自己紹介を済ませたところで、私たちはポア村までの道のりを急いだ。其の道すがらに雑談をまじえながら進んでいく。

そして、2時間後やっとのことで森を抜けることができたのだった。やっと安心できることになったからなのか安堵のため息が2人からしてくる。そのままポア村の入り口に向かったが。なにやらそこには人だかりが出来ていた。

A r r i v a l i n P O A v i l l a g e (前書き)

おまたせしました!!

予定よりも早く帰ってこれたので今日からまた更新していきたいと思いまーすw

Arrival in POAvillage

「何かしら？あの人だからは。」

「さあ？」

「「(まさか・・・)」」

疑問の表情を浮かべる私たちとは違い、クラリス姉妹の表情はどこか青ざめた表情で門の前の人ばかりを見ていた。そして、その中心にいる20代後半ほどの男性が私たちに気づいたかと思うと、すぐさまクラリス達へと視線を変えた。そこで今まで苦悩の表情だった顔に驚きと安堵の表情をみて、葵はこの男性がクラリス達の護衛か従者のうちの一人。そうでなくとも、クラリス達の関係者であることに間違いはないだろう。

葵はこういった人間観察を得意としている。そのため、この男の表情や行動でクラリスの関係者だと目星をつけたのだった。まあ、趣味の一つである人間観察が、この世界に来て中々役に立ってくれそうだ。しかし、一つ残念に思うのは。自分が当事者の一人になってしまったということである。葵は自分自身のことに関しては半分諦めと言う名のめんどくささ。もう半分は自分に関しての興味がないが為に今まで幾度となく立つフラグを捻じ曲げてきている(無自覚で)。

母である冬美はそれを知ってはいるが、あえて何も言わないでいる。それは、葵の気持を優先事項にあげている。というものもあるだろうが、一番の理由としては・・・。

『私の(可愛い可愛い)葵ちゃんをどこの馬の骨ともわからない、なまっちよろい男なんか誰がやるもんですか!!』

と、いうのが一番の理由だろう。そして、この母のタチの悪いところが、葵と仲良くしながら、さりげなく葵の友達でもある自分のファンの子たちにしっかり根回しをしていたり、時たま学校の行事で顔を出す時に葵に気付かれずに牽制しているのだ。葵に彼氏が出来ないのはけして葵だけのせいではないだろう。むしろ、大半の原因はこの母にある。（なんて、タチの悪い母親だ；）

まあ、そんな事はいいとして。人だかりの中心にいた男はこちらへと急いでやって来て、クラリスの肩を「グワッシ」と掴むと、物凄い形相で詰め寄った。

「お嬢様方！お怪我はありませんかっ！？最近は一モンスターが増殖しているんで、二人だけの行動は慎むようにと前々から言っていたではありませんか！！それなのに、よりにもよってこんな時に森へ行かれるなど、何を考えておいでだったのですっ！！」

「「？（・Д・）ビクッ」」

「今回は無事だったからよかたものの。よろしいですか？今後このような軽率な振る舞いはお控ください！！他の者も皆どれほど心配したか・・・」

「「うっ・・・。ごめんなさい。」」

「・・・ふうー。まあ、今回はほんと無事でなにより。先ほど、他の冒険者の方より『バルロス』がうろついていた。との報告を受け、急いでこれからお嬢様方を探しに行こうと思っていたところでした。・・・それと、その方たちは誰です？先ほど、お嬢様方と一緒に森から出てこられましたか。」

「ああ！この方たちは、私たちがモンスターに襲われそうになった時に偶然通りかかって助けてくれたのです。」

「とっても、大きな黒くて犬のようなモンスターを一瞬にして倒してしまっただすよ！／／／」

「犬のような黒くて大きなモンスター・・・。まさか、『バルロ

ス』を倒したというんですか!？」

男は驚いたように顔をすぐそばの葵たちに向けた。その顔にはさまざまと『信じられない』という風な表情をうかべている。しかし、真実なのである。先ほど葵は『検索』魔法で、自分たちが倒したモンスターを調べてみたが、表記された内容はこうだ。

『バルロス』中級モンスター☆☆☆☆

一頭だけでは、あまり大したことはない。常に群れで行動するため。チームワークのとれた戦い方をするので、慣れた冒険者でも苦労するモンスター。

頭もそこまで悪くもなく、スピードをつけて鋭い牙や爪で攻撃をしかける。

弱点…群れで行動しているのもあって、その指揮を執っているボス的存在の奴を倒すと、そのチームワークが一瞬崩れ、倒しやすくなる。

採取…牙と爪。あとは毛皮など

まあ、こんな感じである。そのため、この男の発言は正しい。だが、ここにきてそうそう目立つことは避けたい。

「(さて、どうするか。)」

葵がそう一人で考え込んでいると、隣で母が男にバルロスを倒した時に採取したものを見せて納得させていた。それを見た葵は時すでに遅しと、色々と考えることを放棄した。

「(もう、好きにしてくれ;)」

そんな落ち込んでいる葵に気付いた母はどうしたのか。と葵に訪ねるが、何もないと首を横に振った。そんなこんなで、一人物憂げに浸っていると、なにやら色々と言話がまとまったようである。

「事情は分かりました。今回はお嬢様たちを助けていただいて本当にありがとうございます。後日改めて御礼をしようかと思うのですが、今日は何処にお泊まりで？」

クラリスたちの従者の男にまだ、決まっていないうことをつたえると。隣に居たクラリスが喜ばしげに提案を出してきた。

「では、お二人とも私たちの宿へ来ませんか？ 勿論今回の御礼として宿泊費などはこちらでお支払いします。いかがでしょう。」

まあ、お金に困ってはいなかったが、今日は色々あって疲れた身体を早く休めさせたかった私たちは宿を探す手間もおしいほどだった。その為、そのありがたい提案を受け入れた。

そして、その日の晩は何やらちょっと豪華な宿に泊まり、久々のまともな食事に下鼓をうちつつ夜は更けて行った。

とりあえず、明日はギルドに行くことにしよう。そう、布団にもぐりながら明日の予定を立てる葵であった。

Guild registration

今日もよいお天気です。今はポア村を観光ついでに昨日倒したバルロスの換金とギルド登録を行いたいとおもいまーす。歩くこと25分ほど。中央の道の真ん中あたりにありました。ギルドが。

「案外近いんですねー」

そう呟く私に道を案内してくれたクラリス姉妹と昨日の従者名をゼナールという。昨日の晩御飯の時に改めて自己紹介をした時に知った。

「なにせ、そこまで大きくもない村ですのぞ。」

「まあ、そうですね。取りあえず、とっととギルド登録して。日用品でも買いに行きましょう。」

「そうね。今後の計画も立てなきゃいけないし、そう長いことクラリス達のお世話になってもいられないわ。」

「まあ、私たちのことはお気になさらないでください。こちらは命を助けていただいたんですから。」

「そうですね。お姉さまのいう通りです。どうぞ、なんでも遠慮なくいってください。」

「ありがとう。でも、これ以上はホントいいのよ。宿代が浮いているだけでも私たち十分助かっているわ。」

そう、微笑みまたクラリス姉妹が顔をほんのり赤く染めるのにも気付かず、2人はギルドの中へ入って言った。中はまだお昼前だというのに結構な数の冒険者たちがいた。入ってきた美女2人に一瞬驚くが、次の瞬間にはニヤニヤした顔つきで葵達を眺める。そんな

不快な視線をもらともせず、カウンターへと歩みを進めると、中に居る若い女性の受付にギルド登録の申請を出した。

「今回は冒険者としてのギルド登録でよろしかったでしょうか？」

「ええ。」

「では、まずこの書類にお名前をお書きください。」

渡された書類に目を通すとやはり日本語や英語ではないものの、理解することが出来るようなのでとりあえず一安心。

「（問題は書けるかどうかよねー。）」

そんなことを考えつつ、ひとまず書いてみることにした。するとどうだろう。葵は日本語で書いているつもりなのだが、書いていくそばから見慣れない字に変換されていた。よくよく書類の字とくらべると、形が似ていたので、どうやら書くほうも問題はないようだ。

「では、次にこちらの水晶に触れて頂き、カードにこれまでの成績や能力の判別をしていきます。では、まずフユミ・ミナズキさんからおねがいします。」

「はい」

そうやって、母が透明な水晶に手を触れた時水晶の中から金色の煙が突如として表れ、母のステータスが表示された。

フユミ・ミナズキ（18）

魔力…SS↓SSS
身体能力…SSS
特異能力…SS
知識…A
属性…火、雷、土
総合結果…特S

経験値…下級モンスター 150匹
中級モンスター 53匹
上級モンスター 0匹

「…………へ。」

カウンターの姉さん思わず凝視。しばらく水晶の結果に固まっていたが、ガタツツと席を立ったとおもったら、早口でまくしたてた。

「すいませんが、ギルドマスターと呼んできますので、しばらくおまちください。」

そういうやいなや慌てて奥の部屋へと引っこんでいった。周りを見渡すとカウンターの姉さんと同じく固まったまま動かない冒険者の方たちが視界に入った。どうやらこの水晶の結果は思わぬ波乱を呼びそうだと葵は一人ももんとして、頭を抱えるのだった。

しかし、きつとどのギルドへ行っても同じ状況に陥っただろう場を想定して、結局は遅かれ早かれこのような状況になっていただろうから。今だけの我慢だとおもえば少し楽になる葵だった。そうやって連れてきたのは。それなりに歳をとったおじいさんだった。

「お待たせしました。ここのギルド長を務めているバイヤと申します。この度はなにやら水晶の様子がおかしいとのことでしたので、少しお待ちください」

そうやって、新しい水晶が運ばれてきた。それに今度はわたしが手をかざす。

アオイ・ミナズキ（18）

魔力…SSS

身体能力…SS

特異能力…SSS

知識…B

属性…水、雷、風

総合結果…特S

経験値下級モンスター 240匹

中級モンスター 33匹

上級モンスター 0匹

「……」

またも、周りがフリーズ。どうやら、この結果は普通ではありえない結果なのだと再確認した。すると、歳の甲なのかなんなのか、皆より早く我に返ったギルド長はニツコリと微笑み、水晶から何やらカードを取り出すと、私たちのギルドカードを発行してくれた。ギルドカードについての説明は以前本に書いてある説明を読んで知っていたので省き、そうそうにギルドを後にしたのだった。

ちなみに、私たち2人のギルドランクは今迄のモンスターを倒した経験値からCランクから始まることとなった。バルロスの部位や魔結晶などを換金し、さっそくそれで街の散策の続きを行い、買い物をする。

クラリスたちは他に用事があるとかで、ギルドまでの案内だけをしてもらい、また宿で落ち合う約束をしていたので、それまで私たちは存分にポア村を満喫したのであった。その日のポア村では、今日来た冒険者の話で持ち切りだったとはこの時の2人にはあずかり知らぬことであった。

G u i l d r e g i s t r a t i o n (後書き)

なんか、書いててボロボロになってしまったような気がしてなりません。もしかしたら、そのうち書きなおすかも・・・；

A f u t u r e s c h e d u l e

このポア村に来てからはや1週間。様々な店で服を買ったり、食材を買ったり、ギルドで依頼を遂行し気付けばすでにBランクになっていた。

「ねえー。お母さん。」

「なーにー。てか、名前!」

「あつ; えっと、フユミ姉さん……。ダメだ!! 違和感ありまくり!! 他の呼び方ない?」

「あんた、もう一週間以上経つんだからいい加減慣れなさいよ。」

「無理だよ。なんか、他の呼び方にしようよ!!」

「えー。じゃあ、『フユミ様』『フユミお姉ちゃん』『フユねえー』『フユたん♪』『女王様』さあ、どれ。」

「どれも却下!!! つか、最後の名前じゃねえー!!!」

「はあ、我がままな子ねえー。」

「え? これ私が悪いの? 違うよね。明らかに違うでしょ。」

「どうでもいいけどさー。あんた余所行きの顔はいいんだからそっちに合わせた呼び方にしなさいよ。私はどっちも素に近いからいいけどね。大変ねえー。あんたの猫ちゃん。」

「(スルーされた) へいへい。どうせ私は面の皮が厚いですよ。じゃあ、この外見と行動に見合う呼び方……。お姉さま?」

「おも!!! いいじゃない! もう、めんどくさいからそれで決定ね。はい。この話はおしまい。」

そういつて、またベットの上でごろごろしだす母をみて、ため息を吐きながら提案を出した。

「もう、そろそろ、次の村か町にでもいかない？」

「どうしたのよ。突然。」

ごろごろするのを止めて私の顔をのぞく母の顔は困惑気だ。

「突然でもないよ？この間でランクのBになったし、最初っから色々見て行こうって話だったじゃない。」

「まあ、そうだけどね。」

「それに、ここの人たちってなんだかんだで、いい人ばかりじゃない？知らない人でも気軽に話してくれるし、買い物しててもおまけいつもしてくれるし。このまま長居をしてたら、ここから離れがたくなっちゃじゃない。」

「ふうー。それも、そうね。じゃあ、とりあえず旅の支度をして、クラリス達にもお別れを言わなきゃ。」

「うん、そうだね。」

「出発はいつ？」

「明後日はどう？」

「了解」

今日の夕飯はクラリス達と一緒にする約束だったので、クラリス達に明後日ここを立つことを伝えた。

「そうなんですか。実は私たちも今日で十分な薬草を入手することが出来ましたので。そろそろロロ街に戻ろうと思っていたところです。」

「そうだったんですか。」

「はい。そこでお2人をお願いがありまして。もしよければ、ロロ街まで護衛として付いて来てはくれませんか？」

「「え？」」

「もちろん、ただとは言いません。ギルドを通して正式に依頼をしたいと思っております。どうか、引き受けてはくれませんか？」

「「・・・・・・」」

「まあ、私たち特に行先まだ決めてなかったし。」

「そうね。このままロロ街に行くのもいいかもしれない。」

「では。」

「ええ。その依頼お引き受けいたします。」

そして、早いうちがいいとクラリスたちの要望でその日のうちにギルドへ依頼を受理した。

「では、明後日の早朝に出発するということでよろしいでしょうか。」

「ええ。大丈夫よ。」

「問題ない。ロロ街までは時間がかかり此処では、馬か馬車で行くと思うが、どれがいい？」

「馬車でお願いします。従者も居ますので、移動は楽な方がいいですわ。」

「了解」

「まあ、詳しい話は明日のして今日のところはここでお開きにしませんか。」

「そうだね。なんだかんだと、もうだいぶ暗い。では、また明日のお昼に部屋へ窺うことにするよ。」

「はい。お待ち致しております。」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

こうして、葵たちはポア村を出た後、ロロ街へと向かうこととなった。

A f u t u r e s c h e d u l e (後書き)

ごめんなさい。最近短いのかかけてませんね。今度はできるだけ長く書いていこうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4897v/>

母と娘の異世界日記

2011年9月21日22時04分発行